

さが文化

巻頭言

「教養としての文化芸術」

一般財団法人 佐賀銀行文化財団 事務局長 多良 淳二

田舎暮らしが好きで、生まれ故郷の東脊振村（現吉野ヶ里町）に福岡から転居したのは、平成元年の春でした。その年の暮れに、旧友からいきなり新築で空き部屋があるだろうと、韓国の女子大生のホームステイを半ば強制的に押し付けられたのが、佐賀市に事務局がある「認定NPO法人地球市民の会」との縁でした。

受け入れ先がなくて困っているからと頼まれ、引き受けたのがきっかけで、ほぼ毎年わが家に外国人が来るようになりました。アジアが中心で中国、ベトナム、タイ、ラオス、ミャンマー、カンボジア、バングラディッシュ、インド、ネパール、ブータン、スリランカ、モルジブ、ブルネイ、フィリピン、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ハワイ、グアム、フランス、ロシアなどです。彼らは、民族衣装を身に着け、手土産の民芸品と母国の歌や踊りを披露してくれます。そして、日本や佐賀の歴史文化に興味を示し質問攻めにあります。

一方ステータスや交流事業で海外にでかける機会も増えました。タイの支援先を訪れた時も、同様に民族衣装を纏い歓迎会のパーティがあり、文化交流があります。その時、「日本の皆さん、日本の文化を紹介して下さい」と、リクエストされた時に、



何も答えられなくて恥ずかしい思いをしたことは、今でも忘れられません。大学まで出て教養としての文化芸術は何も身に付けていませんでした。

国際交流や国際理解をする時、共通言語はコミュニケーションをとるために必要な知識です。しかし、それ以上に大切なのは、教養としての文化芸術を身に付けておくことです。

皆さんも母国や郷土の文化に誇りを持って紹介できるようになってほしい。今後、海外に行く機会やインバウンドで外国人の訪問客も増加し、より身近に触れ合う機会も増えるでしょう。「佐賀はどんな所ですか？何がありますか？」と尋ねられた時、「何もなか」ではなく、その時に、佐賀の歴史文化の魅力をしっかり伝えてほしい。お互いの歴史文化の違いを知ることが、国際交流の第一であり、異文化を受け入れ認め合い理解し合うことが国際理解に繋がります。

平和の砦を築くことになり。言葉が解らなくても、音楽は共通言語として垣根を越え、歌や踊りで心は二つになれます。様々な気候風土に、人々の暮らしがあり歴史が刻まれ、独自の文化を育みます。神に捧げる祭りが、芸術の原点であり本質であるかもしれません。本物に触れ本質を捉えた感性は響くものがあり、心の琴線に触れたとき感動を与えます。民族文化も多様性であるから魅力があり、興味は尽きません。幾つになっても好奇心を持ち、心豊かな人生を送るためにも、教養としての文化芸術は身に着けたいものです。今からでも遅くはありません。

CONTENTS

- ・ P 1 巻頭言 多良 淳二
- ・ P 2~4 第45回県民文化フォーラム
- ・ P 5 第60回佐賀県新人演奏会
平成30年度県民のためのミニコンサート
- ・ P 6~8 第68回佐賀県美術展覧会
- ・ P 9 九州・沖縄文化団体連絡会議INさが
平成31(2019)年度助成事業の募集
- ・ P10~11 第56回佐賀県文学賞
- ・ P12 風車 上村 裕香
賛助会員のご紹介・募集

平成30年度

第45回 県民文化フォーラム

第46回 佐賀県芸術文化賞等表彰式

◆2月23日(土)、小城市三日月町のドゥイング三日月で、平成30年度第45回県民文化フォーラム・第46回佐賀県芸術文化賞等表彰式を開催しました。

当日は、早い時間から来場者で賑わい、約250人が参加。佐賀県立牛津高等学校なぎなた部による「リズムなぎなた」でオープニングを飾りました。

まず、佐賀県芸術文化の進展に寄与し、その功績が顕著であり、また今後の活躍が期待される団体および個人を表彰する佐賀県芸術文化賞等の表彰式が行われ、芸術文化賞は、アルモニア管弦楽団とデザイナーの朝重利文氏が受賞。

後半の、パネルディスカッションでは、今後の芸術文化活動の在り方について考える「メディアから見た佐賀の芸術文化」をテーマに4名のパネラーをお招ねし、意見や佐賀の芸術文化について印象を語っていただきました。

県民文化フォーラム

佐賀文化・未来への提言
現状の魅力と課題を踏まえて



当日、ステージに彩りを添えたのは奨励賞を受賞した唐津南高校茶華道部の作品。



小城市は4町(小城市・三日月町・牛津町・芦刈町)で成り立ち、それぞれの町に貴重な歴史・文化資源が豊富にあります。

◆平成30年度 佐賀県芸術文化賞等 受賞者◆

(五十音順)

賞	氏名	分野	賞	氏名	分野
佐賀県芸術文化賞	アルモニア管弦楽団	洋楽	佐賀県芸術文化地域功労賞	永田 博康	文化活動(書・水墨)
	朝重 利文	デザイン		向井 幸子	文化活動(音楽)
佐賀県芸術文化功労賞	井手芳仙窟	煎茶道賣茶流		山北 鈴川	文化活動(吟詠)
	江上 耕思	吹奏楽・音楽教育		山崎 節子	文化活動(日舞)
	西岡 一義	美術(日本画)		山下 松風	文化活動(邦楽)
佐賀県芸術文化地域功労賞	伊藤 昭夫	文化活動(謡曲)		唐津南高等学校 茶華道部	華道
	岡 千代	文化活動(詩吟)	納富 裕子	洋楽	

第45回 県民文化フォーラム発言要旨

今回はこれまでとは趣向を変え、芸術文化に直接携わる方々ではなく、取材を通して佐賀の芸術文化を見据えるマスコミ関係の方々をお招きし、県民の目線からのご意見を伺いました。芸術文化の世界の中からではなく、一歩外からの貴重なご意見に、多くのことを学ばせていただきました。紙面の関係上、ポイントだけしかご紹介できませんが、エキスだけでも感じていただけたら幸いです。

なお、本文は事務局で、発言順ではなくテーマ別に編集したもので、文責はすべて事務局にあることをお断りしておきます。

○ 報道に携わった経緯と芸術文化の面白さ

【岡本】 新入社員の頃は、記者が取材してきた原稿を渡され、読むだけだった。そのうち、人が書いた原稿を読むだけではなく、現場で自分で見聞きしたものを紹介したいという想いが強くなった。自分の目で、耳で、確かめ、人に話すことでネットワークが広がる。文化の世界も同じ事がいえるのではないか。

【小柳】 子どものころの夢、目標は、いろいろなことが原因で閉ざされることも多い。そんな時、ジャーナリストが書いた本を読んで、こういう世界があるというのに気づいた。記者になるきっかけになった。世の中、権威がある人がいることが必ずしも真実ではないことにも気づき、真実を伝えたいと思い記者を志した。芸術文化の世界にも同じようなことはたくさんあると思う。

【平原】 小さい頃から本を読むことが好きだった。その影響で、自然に新聞社に入りたと思うようになった。現在は国際関係がぎくしゃくしている面があるが、文化こそが政治的な難しさをのり越えられる唯一の鍵、文化の中にこそ人間の

ツールがあると信じている。人間としての同じ回路を文化の中に見出す努力をしたい。

【原田】 何も考えず、ものを書いて生きて行きたいと思っていた。社会では、文化芸術が人間のベースになっていると考えている。政治的なものも文化を通せばフラットになる。普通のこととして、日常の中で芸術文化のことを考えながら、生活を豊かにしていけるようなお手伝いをしていきたい。

○ 現在の佐賀の芸術文化の状況について

【原田】 昨今は、絵画でいえば、明治以来の芸術文化を支えてきた佐賀を代表する専門団体である佐賀美術協会の方々も高齢化してきていると聞いており、全国的にも若い方の参加が少なくなっていると感じている。ただあくまで、組織としてつながりを持って活動するという土壌が薄れてきているだけで、個人の活動はそれなりに活発になっているのではないかと考えている。

【平原】 有田や伊万里の陶芸家と接する中で、結果としての形の美しさ以上に、道を求めようとする、究めようとするひたむきさと無心さと執念とといったものに、佐賀の精神を感じている。陶磁器だけではなく、梧竹の書や副島の書を見ている、高い精神性を感じるが、それは「佐賀の書」というのは葉隠である」という話を聞いて、なるほど、佐賀の文化の根底もそこにあるんだなと感じた。最初はよくわからなくても、しっかり見ていると次第に何かが見えてくるようなところが大きな魅力だと感じている。

【小柳】 仕事上、日本全国を回ってきた。昨年、維新博担当になったが、佐賀に居る時は佐賀の歴史はほとんど知らなかった。担当になって、いろいろな人物や場所を取材していく中で、本当に取材しきれないくらい魅力があることを知ることができた。大切なのは、素晴らしい素材が眠っていることに気づき、その魅力を、いかに

パネラー紹介



◆ Norry 岡本(岡本 憲明)
〈NBCラジオ佐賀パーソナリティ〉

福岡県生まれ
MRT宮崎放送アナウンサー&ディレクター
英語通訳案内士(国家資格)としても活躍。



◆ 小柳 貴彦
〈NHK佐賀放送局放送部選挙事務局長〉

佐賀県生まれ
NHK入局、新潟局、長崎局、テレビニュース部(ニュース7、ニュースウォッチ9、おはよう日本などを担当)を経て佐賀局に赴任。



◆ 平原 奈央子
〈西日本新聞社伊万里支局長〉

福岡県生まれ
西日本新聞社入社後、地域報道センター、筑豊総局、本社文化部を経て現職。



◆ 原田 隆博
〈佐賀新聞社報道部学芸班デスク兼キャップ〉

熊本県生まれ
佐賀新聞入社後、スポーツ、文化、武雄支社、写真部記者を経て現職。

コーディネーター

◆ 高島 忠平
〈(公財)佐賀県芸術文化協会 理事長〉

【岡本】

して発信していくか、ということではないかと感じている。
 いろいろな分野の方にお話を聞く仕事をしている。文化は広い分野にまたがっており、一まじめに語ることはできない。芸術関連だけではなく、歴史や食、音楽、祭り、方言などにも目を向けていく必要があると感じている。芸術文化を狭い枠で捉えるのは危険ではないかと思う。

○ 芸術文化と「出身」ふるさととの関係

【原田】

見ている面白い絵というのは、あか抜けていなくても、味がある。地方の土壌が影響しているのではないかと思う。大フィーバーした池田学さんにしても、絵自体は現代的なきれいな線で洗練されているが、多久で育った少年時代が色濃く反映されている。

【平原】

文芸の世界では、佐賀には老舗の同人誌がある。作品もだが、骨太で優秀な評論を書ける人が多いのは佐賀の特徴かもしれない。純文学で重みのある作品を地方で期待するのは難しいが、個人の方が新聞に投稿されるコラムには優れたものが多い。

【小柳】

地元根差した視点、がはつきり見える気がする。維新博をやつてよかつたと思うことは、普通のおばちゃんたちが茶飲み友達同士で、佐賀の歴史を熱く語っているのを見たりした時だ。歴史には様々な人の営みが詰まっており、例えばシユガーロード、和菓子一つをとってみても、歴史がある。維新博が終わった後も継続して掘り起こしていく必要がある、佐賀にはこうした「ネタ」がゴロゴロしていることをもっと知らせたい。

○ これからの佐賀の芸術文化への提言

【岡本】

先日、佐渡裕指揮の、日本センチュリー交響楽団の演奏会に行った。大人の観客が多かつたが、

小中生も多かった。音楽に限らず、幼いころから「本物」に触れておくことが最も大切だと感じている。勉強だけでもない分野も経験させることが重要ではないか。

【小柳】

極論になるが、佐賀のことを直接海外に発信した方がよい。例えば、牛津高校のなぎなた部の動画が注目されている。これに英語のナレーションをつけて海外へ発信すれば、佐賀の魅力はもっと広がるだろう。佐賀にはいいコンテンツがたくさんあるが、東京、国内に向けて、という考えではなく、海外へ発信すべき時代ではないかと考えている。NHKに頼らずに、NHKに取材に来させる、それくらいの意気込みが欲しい。

【平原】

「伝統は運動するものである」という言葉があるように、文化の範疇に入っていない分野では、若者の参加も多い。権威の世界になつた途端に入りづらくなる。開放的であり、懐が深いことであり、新しい文化に対して寛容であることが一番大切ではないか。歴史が深い分野は、どこかで、一線を引いている部分がある。門戸を開くこと、自らが若返ることが肝要であると考えている。

【原田】

メインストリームにまで届かないものに、若者というより時代が流れて行って、今までの文化とは違う形に変化していつていくために、今までの文化が盛り上がっていないように感じているのではないか。文化とは個人的なものであり、



パネルディスカッション

自分たちの活動を楽しむ、鑑賞する立場では、拾って楽しんでいくことが大切。自分の知らないものを楽しむという新しい価値観がある。佐賀の文化に関して言えば応援という意識をもって足を運んで楽しんでもらえれば広がりができるのではないか。

ディスカッションでは、本当にたくさんの方の貴重なご意見を伺ったが、紙面の関係上、大きく割愛させていただいたことを深謝したい(すべて掲載すれば、九ページを超えてしまいました)。全体を通して考えさせられたことは、高齢化や少子化に伴い、芸術文化離れが若者に広まっている、というのは、ある意味正しいが、別の見方をすれば、従来の芸術文化の枠を超えた新しい世界は、大きな広がりを見せている、ということであった。伝統を継承することは大切だが、自分たちの考え方、やり方を唯一無二とするのではなく、「開放的であり、懐が深いこと」であり、新しい文化に対して寛容であること」という提言を、今回のまとめとしたい。

パネラーの皆様、本当にありがとうございました。そして最後まで熱心に聴講いただいた皆様にも、心より感謝申し上げます。
 (事務局)



ドウイング三日月